

新札幌整形外科

関節内治療にPFC-FD導入

患者自身の成長因子を活用

厚別区の札幌整形外科病院(吉本尚理事長・88床)は、変形性膝関節症などに対するハイオセラピーの一つ、血小板由来因子濃縮物フリースドライ化(PFC-FD)療法を導入した。患者自身の血液を利用するため副作用がほとんどなく、身体的な負担が少ないことから、高齢者やスポーツ選手などさまざまなニーズに対応できる。

同療法は患者自身の血液から抽出・濃縮した血小板由来の成長因子を患部に注射することで、組織修復を促進する治療法。関節内の治療にも適応するハイオセラピーで、人工関節が必要だが、導入している。PRP療

法は血小板由来因子を活用した再生医療だが、自施設で製剤を行う。同病用した再生医療等提供計



加工には3週間かかるが、6か月間保存可能

画第3種の認定となっており、腱や靭帯など軟部組織を治療対象とする一方、より施設要件が厳しい関節内の治療には適応せず、患者のニーズに対応できないケースも少なくなかった。

PFC-FDは、患者の血液を専門施設に送付して作成したPFC-FDを用いて治療を行う。病院側は厳しい施設要件クリアや行政手続きが必要なく、導入のハードルは低いという。

患者が負担する費用は保険適用外のため、1回16万5千円。東京の施設に血液を送って加工するため、病院にPFC-FDが届くまでに3週間ほどかかるが、フリースドライ加工のため常温で6カ月保存でき、患者の都合に合わせて治療できるのが利点だ。

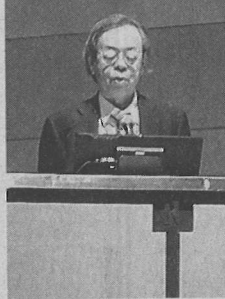
下肢を専門とする等原靖彦副院長が中心となり、主に膝の治療に活用している。等原副院長は「コンサドール札幌のチームドクターでもあり、選手の治療にも実績があることから、PFC-FD療法をきっかけにスポーツ整形分野にも広げ、さらに強化していきたいと考えている。」

同病院では、関節以外の腱や靭帯などが治療対象の場合は、1回3万円

山本理事長が基調講演

DXで持続可能性確立を

道病院学会 道病院協会主催の第1村博彦理事長が、札幌22回北海道病院学会(中)で市で開催された。「デジタル技術を活用した医療の変革DXは地域医療をどうかえるのか」をテーマとしたシンポジウムでは、医療情報システム開発センターの山本



電子データの活用が遅れてきたと指摘する山本理事長が、データ

で即日治療が受けられるPRP療法との使い分けができることも強み。笠原靖彦副院長は「さまざまな患者の希望に合わせて、保存療法から再生医療、手術治療と、幅広い治療の選択肢があるという病院の特性を生かし、他医療機関からの紹介も積極的に受けていきたい」と話す。

隆一理事長は「医療DXの推進について話し合った山本理事長の語りで、スフォームは(変わる、変なり、劇的を言つと説アナログのデジタルのデジタル、あつて、そ業務・製造デジタル化でイゼーショそして組織業務・製造デジタル化、一値創出のビジネスモデルあるデジタルオーメシが、必ずしりには進ました。国内の理は、電子化が、データ

支援ネットワーク構築へ

桑園認知症ケア研究会発足

員ほか、大学看護学部やリハビリ職養成専門学校

期的に認知症ケア研究会を開く